

## 八千代市平戸の遺跡調査の概要と発掘された平戸台8号墳

蕨 由美

### 1. はじめに

「あの鉄塔の下のうちの畑から、古墳が出た」「あの家の納屋の建替えの時、人の骨がいっぱい入った石の棺が見つかった」などというお話を平戸のムラの方からお聞きすることがある。前者の話は平戸に隣接した間見穴古墳群、後者は熱田神社奥の平戸台古墳群の第2号墳のことであろう。

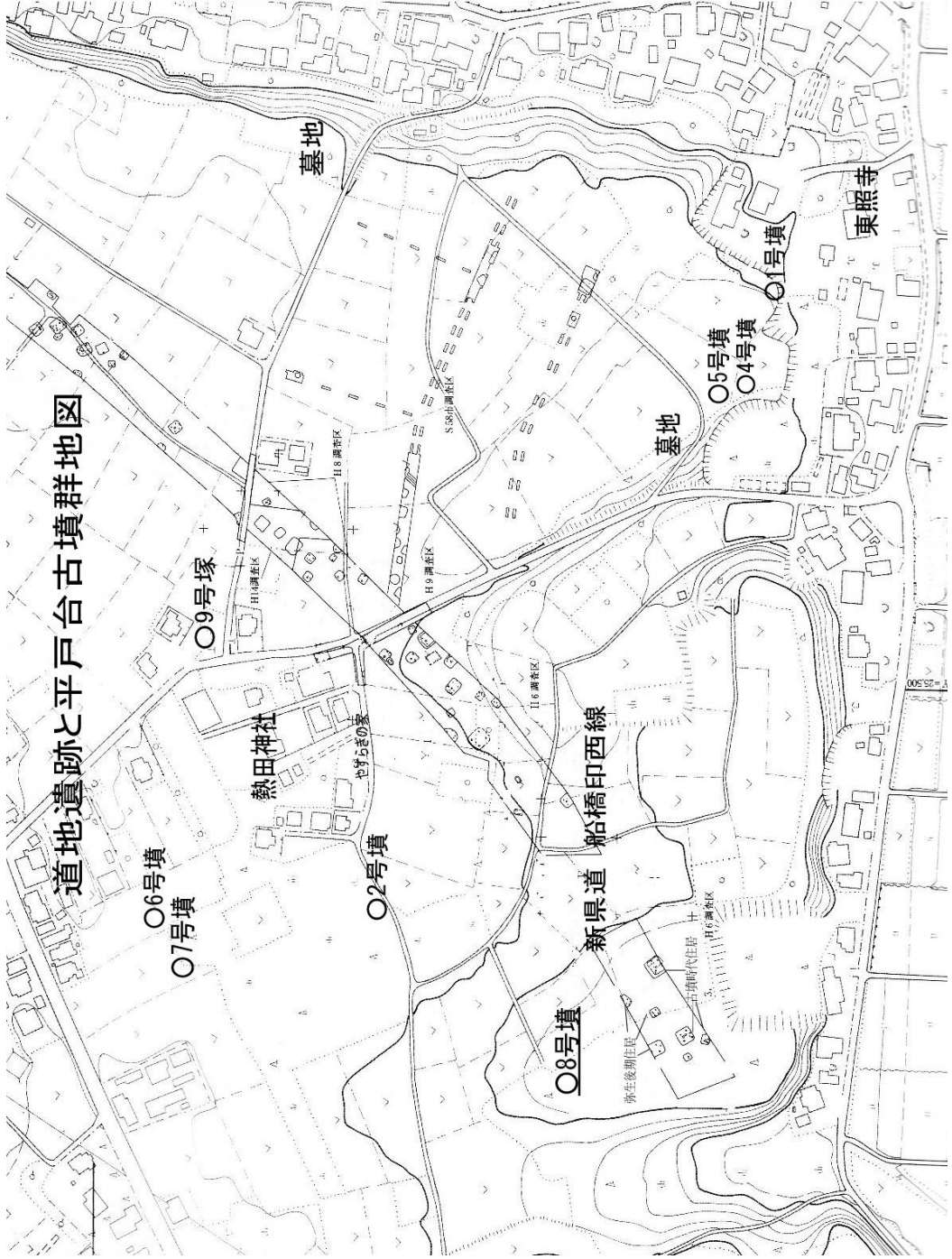
平戸の台地上の畑を歩くと土器の小さなかけらを見ることもあり、また県道船橋印西線バイパス新設による大規模な発掘調査で明らかになった遺跡群や、十年前の調査での平戸台2号墳、そして今年（2008年）の夏、ムラ的话题を呼んだ平戸台8号墳の調査など、平戸は今、古代史発見の最先端、とても興味深い地域なのである。

平戸地区の遺跡について、これまで埋蔵文化財調査の報告例と、今年調査された平戸台8号墳の速報、そしてその結果からこの古墳の持つ特徴を考察してみたいと思う。

図.1



『千葉県八千代市 平戸台2号墳発掘調査報告書』2001. 3. 16 八千代市教育委員会 の第2図に「8号墳」を追加



道地遺跡と平戸台古墳群地図

## 2. 平戸地区の遺跡の概要と埋蔵文化財調査の経過

平戸は、印旛沼西端につきだす剣菱形の半島のうち、中央を走る県道旧 61 号の東側半分を占める。

旧平戸村の集落は台地の東南の裾の縁に沿って「く」の字型に新川に面し、中世以来の旧家が並んでいる。標高約 20m の台地上には平戸の熱田神社を中心に畑と山林が広がり、新宅が点在する。また台地の北と西の縁には古くからの墓地がある。

この平戸地区には、小字の沼上と道地、西ノ上にまたがって道地遺跡があり、ここには平戸台古墳群が重複する。

県道旧 61 号の西側は、旧佐山村で、八千代市内でも神野貝塚と並ぶ縄文集落遺跡「佐山貝塚」が残る。佐山貝塚の南側の宅地開発された「田原窪遺跡」では、市内でも珍しい弥生中期の環濠集落が発掘調査され、また田原窪・佐山台・真木野では古墳が検出されている。

平戸の西側の島田台には、平戸台遺跡と間見穴古墳群を含む間見穴遺跡が道地遺跡に隣接する。

これらの島田台から平戸の遺跡群を貫いて、千葉ニュータウンと国道 16 号を結ぶ幹線道路、県道船橋印西線 61 号バイパス（以下、新県道と略す）が計画され、平成 5 年（1993）から平成 15 年（2003）まで約 10 年間にわたり、千葉県文化財センターによる大規模な埋蔵文化財調査が実施された。それらの調査結果は平成 19 年（2007）までに 5 冊の報告書として刊行され、その実態が明らかになってきている。（1～5）

平戸での八千代市の調査は、昭和 46 年（1971）に平戸台古墳群第 1 号墳が道路工事に伴う土砂採取により石棺の一部が露出して緊急に調査、同年八千代高等学校『史学報』第 2 号に報告されたのが、初出である。（6）

八千代市教育委員会では、昭和 57 年（1982）に道地遺跡の農地整備にともなう農道部分の予備調査を八千代 4H クラブの応援を得て実施、ついで昭和 58 年（1983）1～2 月に同委員会の本調査が行なわれ、昭和 61 年（1986）3 月に報告書『平戸道地遺跡』を刊行している。

また平成 9 年と平成 11 年 6 月に平戸台 2 号墳を調査し、平成 13 年（2001）3 月に報告書が刊行された。（7）（後述）

そのほか農道整備にともなう道地遺跡の小規模な調査も引き続き連続的に実施された。

また開通した新県道沿いの山林や谷津の開発もいよいよ始まって、本年（2008）5 月から 8 月に平戸台群第 8 号墳が緊急発掘調査され、現在（2008 年 9 月）整理作業中とのことである。

## 3 道地遺跡の概要

道地遺跡の新県道建設用地が発掘調査され、この遺跡が弥生時代後期から古墳時代の大规模集落の一部であったことがわかった。

この県の調査は、道路幅区域のみの調査であったが、主な遺構として、旧石器の石器集中地点 2 か所、弥生後期～古墳前期の住居跡 75 軒・掘立柱建物 1 棟・土坑墓 2 基・土坑・環濠 1 条、古墳時代中・後期の住居跡 9 軒・古墳 2 基、奈良時代の土坑 2 基が検

出された。縄文時代の遺構は検出されなかったが、調査区北東端などでは加曽利 E 式などの縄文の土器片が弥生～古墳時代の遺構に混入していたと報告されている。(2) 遺物は、弥生後期～古墳前期の良好な土器資料が豊富である。

図.3 (2)

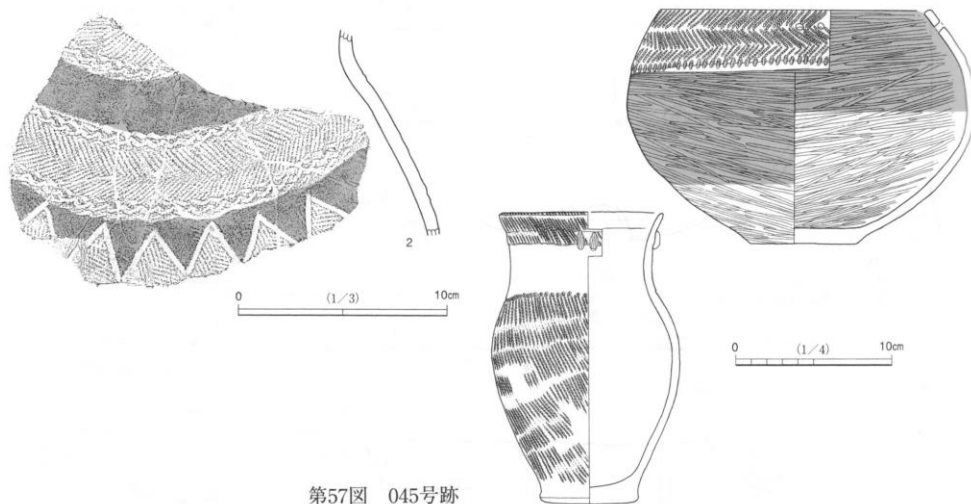
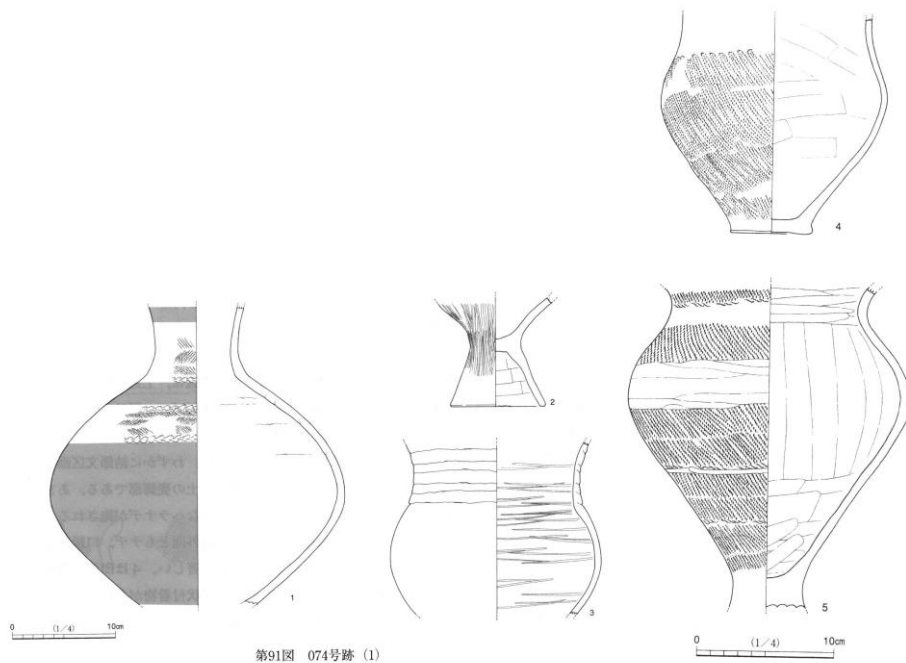


図.4 (2)



特に弥生後期の土器は、東京湾岸に特徴的な久ヶ原系の土器、すなわち帯縄文が施紋された壺や輪積みをもつ甕と、北関東系の縄文を多用する土器が同一住居跡に残されていた事例がいくつかあった。(図3、図4)

さらに、胴部全体に縄文を施した台付甕が出ている。(図4の右下の5) 台付甕は西関東に多く、縄文を多用する北関東の土器にはみられない土器である。まさに南北の異系統土器が混在した状況と、また異系統の要素を一個体に内包する様相がそれぞれにみてとれる。

そしてこれらの混在と融合の状況は、栗谷遺跡などの遺物と共に、印旛沼周辺の弥生後期土器の整理と編年に重要な情報を供すとともに、弥生後期から古墳前期への社会構造の変革期に際して、平戸・佐山半島が、東海～東京湾岸と常陸～北総の水系交通に大きくかかわった要衝の地であったことを示している。

#### 4 平戸台古墳群9基の現状

道地遺跡には、台地の縁辺部に4基、やや奥まった所に4基の合計8基の古墳と塚1基がある。(図2を参照)

##### ① 第1号墳

工事によって箱式石棺の一部が露出、墳丘は方形の可能性がある。調査により石棺から人骨の一部と歯のみ検出された。土取りされて消滅、現存しない。(6、7)

##### ② 第2号墳

墳丘は昭和52年(1977)頃まで確認され、剣形模造品が採取されていた。その後、削平されて建てられた納屋の建て替えの際、石棺の存在が以前から認識されていたため、教育委員会により、平成9年(1997)に確認調査が、平成11年(1999)には詳細な本調査が行われ、この古墳は、弥生後期の住居跡に築かれた重複した遺跡であることがわかった。

古墳の石棺は筑波石による箱式石棺で、蓋石3枚・小口壁東西各1枚・側壁北3枚南4枚・床石4枚の合計16枚の石を組み合わせる。

石棺内遺物は、15体分以上の人骨が主で、そのほか鉄製直刀・刀子・鉄鏃・鉄環・銅環・木製品・石製勾玉・切子玉・褒玉・ガラス製小玉が出土している。(7)

③ 第3号墳は昭和52年(1977)頃まで石棺のみあったと聞けるが、現在は不明である。

④ 第4号墳と第5号墳は崖際に半壊状態で存在している。調査はされていない。

⑤ 第6号墳と第7号墳は、未調査のまま墳丘が消滅し、畑になっている。

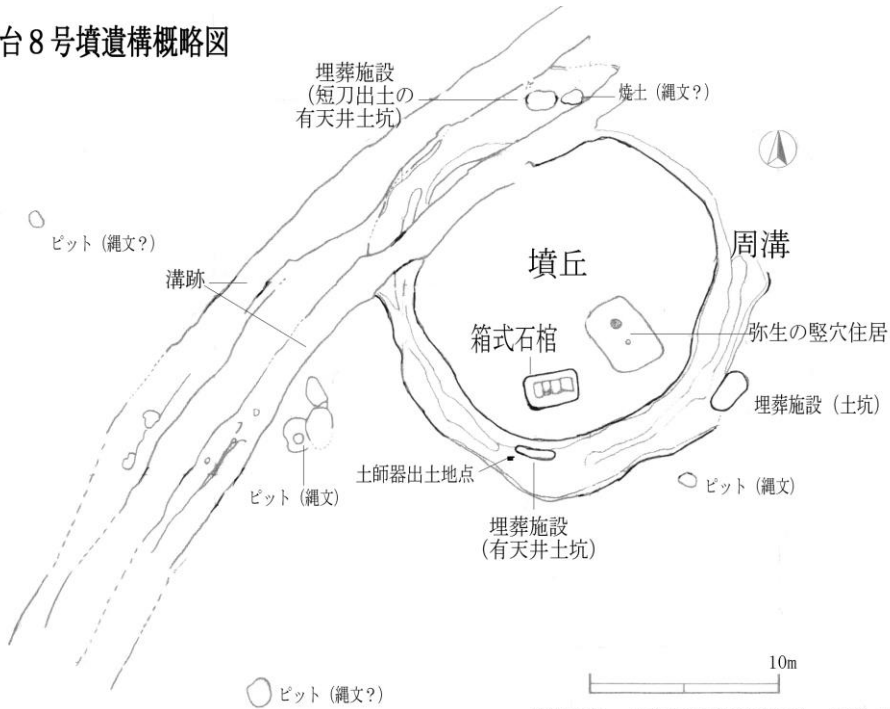
⑥ 第9号の塚は道祖神の背後の盛り土で、古墳か中世以降の信仰の塚かは不明である。

##### ⑦ 第8号墳

西ノ上と間見穴の間の小さな谷津に南面した新県道沿いの山林内に完形で残っていたが、資材置き場埋め立て工事のため平成20年(2008)5月より、緊急発掘調査が行われた。(次の項にその概略を記す)

図.5

## 平戸台8号墳遺構概略図



原図提供：八千代市教育委員会 2008.7.27現在

### 5 平戸台8号墳の発掘調査の経過と、明らかになった遺構・遺物

平成20年(2008)5月から八千代市教育委員会の調査が始まり、下旬の時点で、この古墳は墳丘径16m、周溝外径23mの小円墳、そして墳丘南側裾部に箱式石棺の蓋石と見られる片岩が確認された。(写真1)

6月中旬、片岩の石棺蓋石は3~4枚、周溝の中から土師器壺と石棺の上あたりから須恵器が見つかり、また周溝に沿って、埋葬施設と思われる土坑3基が発掘された。



そして7月9日、本会会員など多くの人が見守る中(写真2)、石棺の蓋が開けられ、翌10日、石棺内の土が除去されるに従い、鉄鏝が、続いて下肢部の骨と鉄刀が現れてきた。

7月21日には、八千代栗谷遺跡研究会の現地学習会、27日に八千代市教育委員会主催の一般公開の現場説明会が開催され、2体以上の人骨、両脇に2振りの大刀が残されたままの石棺、周溝とそれに沿った土坑墓、また出土した須恵器などが多くの見学者に公開され、8月には石棺を納めた掘り方の発掘が続けられ、同月下旬に終了した。

7月27日の現場説明会で明らかにされた平戸台8号墳のデータは次のとおりである。

形態は円墳、規模は墳丘の径が15～16.6m、墳丘の高さ80cm、周溝の外径21～23.3mで、古墳後期の6世紀後半～7世紀前葉と推定される。

主体部の埋葬施設は墳丘南側裾部に組合式箱式石棺が、ローム層を掘りこんで設けられている。石棺は側壁が4枚×2面、小口2枚、床石5枚、蓋石4枚の計19枚の片岩で構成され、石材は筑波石と推定されるが、もろく欠けやすい。石棺内部の規模は長軸186cm、短軸51～59cm、深さ51～53cmである。

石棺内からは、人骨が成人3体以上と子供1体以上、副葬品は直刀2振り、鉄鏃10本、玉類は管玉・棗玉・ガラス玉の計10点が検出された。(写真3)

また、周溝に沿って、北・南・南東に土坑3基が検出された。北側と南側の土坑は、オーバーハング状の有天井土坑で、北側土坑から短刀が出土した。南東側の土坑は大きさや形態から木棺直葬墓と推定される。石棺外の遺物は、石棺直上で須恵器の壺(写真4)が、また南側土坑の傍から土師器の甕が出土している。

その他の遺構として縄文時代と思われるピットが数基、周溝北側を切って幅1mの浅い溝跡2条が見つかっている。また墳丘下から弥生時代の竪穴住居が検出されている。

道地遺跡の平戸台8号墳と同一台地上の県調査区の住居跡の様相については、8号墳寄りに弥生後期の竪穴住居が3軒あるが、古墳時代の前期1軒と中～後期3軒の住居跡は8号墳からやや遠い南東側にある。

道路用地の調査範囲でデータに限りがあるが、弥生後期から古墳時代までは連続して集落が営まれていることと、古墳時代中期以降、集落と台地の縁の墳墓とはある程度の間隔をおいていることが推察される。

## 6 平戸台古墳群に隣接する間見穴古墳群の後期古墳について

平戸台8号墳から浅い小さな谷を挟んで隣接する島田台の間見穴遺跡は、新県道用地の道地遺跡西側部分で、千葉県文化財センターにより発掘調査された。弥生時代から古



墳時代の大規模集落の一部と、間見穴古墳群の存在のほか、間見穴遺跡からは縄文早期・条痕文期の貝集積・竪穴住居・炉穴も検出している。

間見穴古墳群では、前期古墳4基と後期古墳5基が検出され、前方後方墳の可能性のある002号墳からは壺型埴輪が出土している。

後期の005号墳と006号墳の2基は、板石組の箱形石棺を持ち、武器・装身具・馬具などの副葬品と埋葬人骨が複数出土している。(写真5は、筆者が1994年10月の間見穴古墳調査現地説明会で撮影)



いずれも墳丘は削平されていたが、石棺は地表面の下に構築されていたので、調査時まで残っていた次第である。

また道路幅の調査なので全墳形はわからないが、周溝から類推して006号墳は円墳、005号墳は006号墳を利用改変した小型前方後円墳の可能性があり、両石棺とも墳丘裾部にあったと推定される。(3)

#### 7 平戸台8号墳の特徴と考察

平戸台8号墳の特徴として、次のような点があげられる。

- ・小規模な古墳からなる群集墳の中の一つの円墳である。
- ・主体部が墳丘の墳頂部ではなく、南側裾部に、地面を掘りこんで造られている。
- ・石棺は板石の組合せ箱式石棺である。
- ・成人一体分の大きさしかないこの石棺内に複数の人数が追葬されている。
- ・棺内の副葬品は、鉄刀・鉄鏃・玉類であった。
- ・周溝に沿って複数の埋葬施設(土坑)がある。
- ・石棺直上に須恵器壺を伴う。埴輪を伴わない。

これらのいくつかの特徴は、市毛勲が昭和38年に『古代』で論じたいわゆる「変則的古墳」の特徴点と一致する。(8)

同誌で市毛氏は「1.内部施設が墳丘裾部に位置すること、2.内部施設が通常扁平な板石を用いた箱式石棺であること、3.合葬(追葬)を普通とすること、4.群集墳を形成していること、5.東関東中央部に分布すること」をあげ、「変則的古墳」の特徴とし、その分布地域は、常陸では霞ヶ浦沿岸・筑波山南東部の南東部、下総では我孫子の高野山古墳群を西限、千葉市緑区平山町の中原古墳群を南限とする範囲としている。

「ほとんどの後期古墳は、横穴式石室をはじめとする内部施設が墳丘の中央に位置するように設けられている」ことを「原則」する視点から、「東国の後期古墳をみると、一つの変った古墳の型を見出す」として「変則的古墳という認識の上に東国における後期古墳を分析してみよう」と試みられた由である。

特に、「変則的古墳」による被葬者の増大は、「それによって族長層の権威の象徴とし



て存在した古墳本来の意義をうしなわせしめ、墳丘を墓碑的存在に化してしまった」とこの地域の時代性を指摘している。

また同時期、『金鈴』第 18 号で、中村恵次も千葉県における後期古墳について同様の点を提起している。(9)

なお中村氏が類例としてあげる事例の中に「印旛郡阿蘇村栗谷古墳」がある。この論文中の参考文献の大川清「千葉縣印旛郡阿蘇村栗谷古墳」『古代』第 11 号(10)によれば、戦時中の開墾により封土が削られて開棺されてしまった古墳であった。戦後間もなくのころの調査記録によれば、棺は蓋石 3 枚、左右各 3 枚と前後 1 枚の側壁、底石 4 枚の緑泥雲母片岩で築造した長さ約 180 cm 幅約 65 cm の組合式石棺で、内部には長刀 3 口 刀子 3 口、鉄鏃若干、玉類のほか、人骨が 2 人以上検出されていた。また棺の位置が地表下にあることから、「封土の裾近くに位置する類例に所属するもの」と推察している。なおこの古墳のあった保品栗谷古墳群跡の台地先端部は造成されて、現在は保品の老人ホーム「八千代城」敷地となっている。

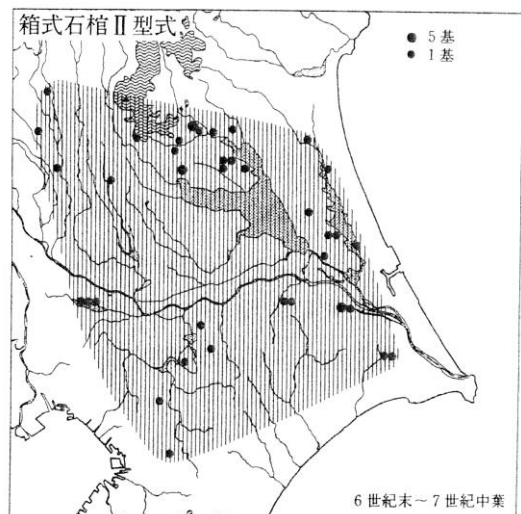
そのほか、昭和 47 年(1972)に耕耘機が畑の穴に落ちて、中に多数の人骨が見えたため、緊急発掘された神野芝山 2 号墳もまた、墳丘が崩された後、地下に石棺だけが残っていたというケースである。蓋と底は各 4 枚・側壁各 2 枚の雲母片岩の切石を組み合わせた箱式石棺で、墳丘中央部より西南側の裾部に設置され、玉類・刀子・鉄鏃が副葬されていた。(11)

また、昭和 58 年(1983)に緊急調査された大和田の堰場台古墳も板石 16~18 枚を組み合わせた箱式石棺で、棺内に人骨 7 体分、鉄剣などが出土している。(6)

八千代市域の平戸台 1 号墳・平戸台 2 号墳・間見穴 005 号墳・間見穴 006 号古墳・栗谷古墳・神野芝山 2 号墳・堰場台古墳と、今回調査された平戸台 8 号墳を比べてみると、地表下に築かれた板石組合せ箱式石棺の形態、副葬品などに著しい一致がある。

箱式石棺の型式による編年について、石橋充は、箱式石棺の祖形が「王者の棺」としての畿内風の長持形石棺の導入に始まり、そのイメージを模した箱式石棺が一枚板の組合せから、「棺」の意識が薄れるにしたがって石材が小型化していく過程を、特に床の構造から I~IV 型式に分類している。(I 型式=床が大型の板石を含む 1~3 枚で構成、II 型式=小型の板石 3 枚以上、III 型式=不定形の板石の組合せ、IV 型式=割石などを敷き詰める)(12)

その分類に当てはめると、八千代市域の箱式石棺を持つ古墳のほとんどが小型の底石 3 枚以上で構成されている点から、石橋充の分類の II 型式に該当し、常総地域に濃密で



広い分布圏(図6)をもつ6世紀末から7世紀中葉の古墳であると推察される。

今回の平戸台8号墳の調査は、他の7基とも墳丘が削平された古墳の調査であったのに対し、墳丘全体が保全されたまま、未開棺の状態で行われた点に大きな意義がある。平戸台8号墳で検出された石棺直上の須恵器の壺は、石橋氏の編年を補って年代推定のよい資料となるであろう。

また、特に周溝内の3基の埋葬施設、うち2基が有天井を伴って完掘された点も重要である。周溝内の有天井土坑については、「土坑墓の一変形」として注目された佐倉市の星谷津遺跡や立山2号墳に類例がある。(13)

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての方形周溝墓には、周溝内の土坑に埋葬する例が多くみられる。黒沢彰哉は「特異埋葬施設古墳」の論考の中で、「全てが弥生時代の遺制とは考えないが、その中に流れる共同体社会墓制の存在を考えないことには、このような地域的特色は理解できない」と述べている。(14)

645年の大化改新の後、「大化の薄葬令」により7世紀後半以降、古墳はさらに小規模化し、古墳時代の「先進地」市原周辺では、「地下式横穴」という簡素な小形の墓を造り始める。(15)

平戸台8号墳においても、隣接した間見穴古墳群でも、古墳の墓域に後の時代の集落が重複することはない。古墳の時代が終わっても、これらの古墳群の墓域としての認識は維持され続け、のちの時代まで残存していたのではないだろうか。

想像の域を出ないが、十数基あったであろう平戸台古墳群の各古墳は、遅くとも7世紀中葉までにムラの各一族の長の墓として築かれ、その後、家族を石棺内に追葬、さらに周溝内の土坑にも埋葬し、一族の家族墓として約一世紀以上の長きにわたり使用されたと思われる。

古墳は政治的権力の象徴として語られることが多いが、古墳時代の終焉期、八千代市には、家族で大事にしてきたこのような小さな古墳群も数多くあったのだ。今回の平戸台8号墳の姿は、その後のイエとムラを語る原点を教えてくれたように思える。

最後に、平戸台8号墳の発掘調査を担当、尽力され、また調査経過を公開して資料を数多く提供くださった八千代市教育委員会常松成人氏、また平戸台8号墳調査地に再三にわたりご来蹟、ご指導いただいた大塚初重先生(明治大学名誉教授)に厚く感謝の意を表します。

#### 出典・参考文献

- (1)『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書1—八千代市島田込ノ内遺跡—』1998.3 千葉県文化財センター 以下(2)～(4)も同センター刊
- (2)『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書2—八千代市道地遺跡—』2004.3
- (3)『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書3—八千代市間見穴遺跡—』2004.3
- (4)『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書4—八千代市間見穴遺跡(2)—』2005.3
- (5)『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書5—八千代市島田込ノ内遺跡(2)・間見穴遺跡(3)・道地遺跡(2)—』2007.4 財団法人千葉県教育振興財団

- (6) 『八千代の歴史 資料編 原始・古代・中世』1991.11 八千代市史編さん委員会
- (7) 『千葉県八千代市 平戸台2号墳発掘調査報告書』2001.3 八千代市教育委員会
- (8) 市毛勲 1962「東国における墳丘裾に内部施設を有する古墳について」『古代』第41号 早稲田大学考古学会
- (9) 中村恵次 1961「下総における後期古墳」『民衆史研究』創刊号、1964.9「千葉県における後期古墳—とくに群集墳の分布・内部施設被葬者について—」『金鈴』第18号 早稲田大学考古学研究会 に加筆再録、1978『房総古墳論攻』に再々録
- (10) 大川清 1954「千葉縣印旛郡阿蘇村栗谷古墳」『古代』第11号 早稲田大学考古学会
- (11) 『八千代市の歴史』1979 八千代市編さん委員会
- (12) 渡辺修一 1985「「群小区画墓」の終焉期(2) —「方形周溝遺構」における埋葬施設の新例とその検討—」『研究連絡誌』第14号 千葉県文化財センター
- (13) 石橋充 1995「常総における片岩使用の埋葬施設について」『筑波大学先史学・考古学研究』第6号
- (14) 黒沢彰哉 1993.6「常総地域における群集墳の一考察—茨城県新治郡千代田町大塚古墳群の分析から—」『婆良岐考古学』第15号 婆良岐考古同人会
- (15) 『八千代市の歴史 通史編 上』2008.3 八千代市史編さん委員会